

平成五年(あ)第九の四号

上 出 趣 意 書

被 告 人 廣 野 秀 樹

右の者に対する傷害準強姦被告事件について上告の趣意は左記のとおりである。

平成五年一二月二四日

弁 護 人 菱 川 雅

文



第三小法廷

最 高 裁 判 所 第 三 小 法 廷 御 中

記



191
甲 第 二 五 号 証

第一 憲法違反

原判決には、被告人の暴行傷害の実行行為を一括して把握している点、及び、行為の被告人の責任能力の有無の判断において厳格なる認定をしていない点において、憲法第三一条の違反がある。

一 暴行傷害行為の一括的把握

原判決は、「本件各犯行時、…：完全な責任能力を有していたことが明らかである」（同判決「理由」「一」「2」）とし、被告人の暴行傷害の実行行為を分けず、暴行傷害行為を一括的に把握した上（従って明示されてはいないが故意もその全体を一括して認めていることになる。）、責任能力の存在を認定している。

しかしながら、犯罪事実につき要求されるいわゆる厳格な証明により認定するためには、右「蹴り」とそれ以前の行為を分けて認定すべきである。そ



のような認定をしていない原判決は憲法三一条に違反する。

1 本件被害者の受けた傷害のうち、「頭骸骨骨折」「右急性硬膜下血腫」(医師黒田英一の供述調書)は、被告人の「蹴り」(被告人の司法警察員に対する平成四年四月一三日付供述調書第一三項)により生じたものと認められる。

2 そして、右「蹴り」により生じた結果は極めて重大であり、かつ、右「蹴り」は、「私は、車から飛び降りて、瞬間に彼女の顔めがけて足蹴りをしているのです」との被告人供述(右同書右同項)に示されているように、自動車から飛び降りた瞬間の突発的なものであった。

つまり、被告人の暴行は時間的には連続してなされているが、右「蹴り」の前の行為と右「蹴り」とは、質的に異なる。右両行為を一括して把握することは、事実を歪めるものである。

3 むしろ、犯罪事実につき要求されるいわゆる厳格な証明により認定するためには、右「蹴り」とそれ以前の行為を分けて認定すべきである。よっ

て、そのように分けて認定しなかった原判決は、憲法三一条に違反する。

二 責任能力の有無の判断について

原判決は、主に、「各犯行の場面の被告人の行動は一応了解可能であり」、「被告人には意識障害がないこと」、「被告人の性格特徴については、明らかに精神病者とは異なるものであること」、「被告人に関して精神薄弱等の症状が合併する等の特別の事情はないこと」から、本件各犯行時には、被告人は完全な責任能力を有していたことを認定している（理由二二）。

しかしながら、被告人の責任能力の欠如又は減退を根拠づける事実も存在する本件においては、右のような原判決の認定は、厳格さに欠け、憲法三一条に違反する。

1 被告人の司法警察員に対する平成四年四月一三日付供述調書第一三項中の供述に、「彼女が助手席のドアを開け、逃げ出そうとして、上半身だけを歩道上に倒れ込み下半身だけが助手席に残っている状態になった」のに

対して、「私は、瞬間に、運転席から助手席をまたぎ、助手席から外に出て、歩道上に上半身が倒れ込んで顔を少しうかせて、車の後ろ方向に顔を向けている彼女に対し、私は、右足のひざをまげ、履いていたカジユアルシューズの靴底で、彼女の左頬から鼻、口辺りを下の方、正確には斜め下方向に相当力を入れた状態で足蹴りしたのです」という供述がある。この一連の被告人の行動は、それ自体常軌を逸している。しかも、被告人の各供述調書や参考人の各供述調書からは、被告人が被害者に対して絶大な好意を抱いていたことが認められる。にもかかわらず、被告人の被害者に対する右の「蹴り」の態様は右好意とは矛盾する。そうすると、被告人の完全な責任能力を示すかのような事実が併存したとしても、被告人の右足蹴りの時点においては責任能力が欠如ないし減退していたとの疑いを抱かざるをえない。

2 さらに、右供述調書同項末尾には、「その時には興奮していたので気付かなかったのですが、足蹴りにした事で彼女は右頭部を歩道上にたたきつ

けられたと思う」との供述がある。さらに、被告人の同供述調書第一四項冒頭に、「私はわれにかえり」との供述がある。これらの供述も、被告人の右足蹴りの時点においては、同人の責任能力が欠如ないし減退していたとの右疑いを増幅せしめるものといえる。

3

原審でなされた鑑定においても、傷害については、責任能力の存在を根拠づける積極的事実を指摘せず、「情動の不安定さと欲求不満耐性の低さのため、衝動抑制がきかずに暴力行為に及んだと考えられ」とするのみで、傷害行為時の責任能力の存在を認めている。そして、右「情動の不安定さ」「欲求不満耐性の低さ」いずれについても、その程度は明らかにされていない。また、同鑑定は、強姦に関しては、「突発的な行動であり、被告人は興奮状態であったとは思われるが」としつつ、「意識は清明であり、被告人の性格傾向に基づいた行動パターンであり」ということから、右「興奮状態」の程度を明らかにせず、責任能力の存在を認めている。

また、鑑定は、犯行時点から長時間経過した控訴段階で初めて問題とさ

れたものであり、犯行時点の責任能力判定のために適切か否か大いに疑問が残る。

4 右1、2、及び、3の各事実を総合的に検討すると、本件各犯行時、殊に傷害行為の時点には、被告人が完全な責任能力を有してはいなかったのではないかという合理的な疑いが残る。それにも拘らず、前記のような事情のみから完全な責任能力を認めた原判決は、憲法三一条に違反する。

第二 最高裁判所の判例の趣旨と相反する判断

原判決には、軽い結果についての認識しかなかった被告人に対して、重い結果に対する故意を認めている点において、最高裁判所の判例の趣旨と相反する判断をしている。

一 最高裁判所昭和六一年六月九日判決は、「覚せい剤を麻薬と誤認して所持したときは、麻薬取締法の麻薬所持罪を犯す意思で覚せい剤取締法の覚せい剤所持罪にあたる事実を実現したことになるが、両罪は、その目的物が異なり、後者の刑が前者の刑よりも重いだけで、そのほかの犯罪構成の要件要素は同一であるから、麻薬と覚せい剤との類似性にかんがみると、両罪の構成要件は、軽い前者の罪の限度において実質的に重なり合っていると解すべきであり、したがって、その重なり合う限度で軽い麻薬所持剤の故意が成立する。」としている。これは、被告人の認識が軽い罪の認識であった以上、たとえその認識を超える重大な結果が生じたとしても、被告人は、被告人の軽い罪の限度で処罰されるとの趣旨の判例である（なお、刑法三八条二項）。

二 しかるに、原判決の量刑は、被告人の軽い傷害結果の認識にもかかわらず、現実に生じた重大な結果に対応する刑を料しており、これは、右の判例の趣旨に相反している。

1 被告人には、前科がない。それにも拘らず、原判決は、被告人に、懲役



四年の実刑判決を下している。このことから、原判決は、被告人に、本件被害者に現実に生じた傷害結果に対する故意を認め、更に、準強姦につき、被告人が被害者の抗拒不能の事実を十分あるいは相当程度認識していたことを前提に刑を量定したものと認められる。

2
しかし、まず、被告人の司法警察員に対する平成四年四月一三日付供述調書第一三項中の供述に、まず、「私は、車から飛び降りて、瞬間に彼女の顔めがけて足蹴りをしているのです」との供述があり、次いで、（被害者に蹴りを加えた直後に）「やり過ぎたかなあと思った」との供述があり、さらに、「その時には興奮していたので気付かなかったのですが、足蹴りにした事で彼女は右頭部を歩道上にたたきつけられたと思う」との供述がある。これらの供述からすると、被告人は、蹴りをみずからの暴行が、被害者の重大な脳の損傷を生ぜしめる危険性があるとまでは認識せずに実行したことが認められる。

3
よって、原判決の量刑は、被告人の軽い罪の認識にもかかわらず、現実

に生じた重大な結果に対応する刑を料しているものといえる。もちろん、同一構成要件内における具体的事実の錯誤は、故意を阻却しないというのが判例一般の態度である。しかし、本件のように、被告人の認識した暴行の危険性と、現実が発生した結果の径庭が大きい場合にまで、現実が発生した結果に対する故意犯の成立を認めることは、前記昭和六一年判例の趣旨に相反している。

第三 事実誤認

原判決には、被告人の故意及び責任能力の認定において、判決に影響を及ぼすべき重大な事実の誤認があり、これを破棄しなければ著しく正義に反する。

原判決は、準強姦の故意を認めている。しかし、果たして被告人が被害者が抗拒不能の状態にあったことを認識していたか合理的な疑いが残る。よって、この点において、事実の誤認がある。

1 被告人の供述調書から、被告人は、被害者が被告人に対して好意を持っていると認識していたことが認められる。そのような認識があったならば、被害者が抵抗しないことも、好意の現れと考え、被害者が抗拒不能であるとの認識がなかったというとも、極めて自然である。

2 また、被告人は、性交中に、被害者が声を出して応答したのを聞いている。

3 よって、被告人には、被害者が抗拒不能であるとの認識がなかったという合理的な疑いが残る。

二 責任能力について

この点については、前記「第一」「二」で述べた通りである。

第四 量刑不当について

原判決は、刑の量定が甚だしく不当であつて、これを破棄しなければ著しく正義に反する。

一 前記「第二」「二」「1」で述べたように、原判決は、被告人に、本件被害者に現実に生じた傷害結果に対する故意を認め、更に、準強姦につき、被告人が被害者の抗拒不能の事実を十分あるいは相当程度認識していたことを前提に刑を量定したことを示している。そして、また、原判決は、被告人に完全な責任能力が存在していたことを前提に量刑をしている。

しかしながら、前述のように、被告人には、原判決が前提にした故意を認めるに足りるほどの認識はなかったし、また、責任能力の存在についても疑いが残る。

二 また、原判決は、「当審においては、会社の関係者に本件の責任を転嫁し

て、事実関係まで否認するに至るなど反省の態度は不十分である」(同判決「理由」「三」ということも刑を重くする資料としている。

しかしながら、右のように一見「責任を転嫁」するかのような供述や、「事実関係まで否認する」供述は、被告人が、自らの手で、愛する人に重大な傷害を負わせてしまったことを悲嘆し、精神的混乱状態に陥っているためになされたものである。よって、これらの供述は、被告人の反省が不十分であることを示すものとまではいえない。

三 右一及び二から、原判決の量刑は不当であると思料する。

以 上